

# 水の値段

文化から考える水資源の価値

2004年11月1日に東京にて開催いたしました。

## 【特別報告】

### 「しのびよる水の危機」～水は誰のものか～

中村靖彦 東京農業大学客員教授・農政ジャーナリスト

## 【テーマセッション】

### 「水への『思い』に込められた値段」

菅 豊 東京大学東洋文化研究所助教授

ソーシャル・キャピタル

### 「経済から見る、人のつながりと水の価格」

諸富 徹 京都大学大学院経済学研究科助教授

### 「必要なのは、安い水？ 高い水？」

沖 大幹 東京大学生産技術研究所助教授

## 【パネルディスカッション】

### 「水に値段はつけられるのか」

コーディネーター：鳥越皓之 筑波大学大学院人文社会科学研究所教授



「水を資源と見なしてよいのか？」  
「水はどのような価値を持った資源なのか？」など、水のプライシングとその影響については、世界中で大きな議論を呼んでいます。当センターとしては、このような問題を単に市場メカニズムの問題として捉えるのではなく、文化制度の問題として捉えようと、どのような問題が浮かび上がるのかを問いたいと考えました。

水の問題について丹念な現場取材を続けてきた中村靖彦さんは、水のプライシングによる分配に危惧を表明し、ボトルドウォーターなど飲料水ビジネスの現状を報告した。そして、世界中で所有権が曖昧なまま地下水が汲み上げられており、食糧供給に及ぼす影響も危惧されると指摘した。さらに、最終的に、水は誰のものなのかを真剣に検討すべき時期がきていると述べた。

菅豊さんは民俗学の観点から、「そもそも水の値段が体現している価値とは何なのか」という問いかけを行なった。人それぞれが水に多様な価値を描いているという事実を、新潟県大川の川鮭漁のケースから紹介し、経済的価値だけでは水は評価できず、そこに人間関係が埋め込まれている点に注目

すべきと指摘した。これらはかわりを生み、信頼を生む価値や、精神的価値を生む一方、洪水などの負の価値があることもなおざりにできないと指摘。これらの価値は、「触れることができない」、「数えることができない」、「置き換えることができない」という特徴を持っており、この3側面を持った水を価格評価することは大変に困難と述べた。

**“コモンズ”としての水**

- 水は、基本的人権である。
- 水は、永遠にコモンズ（共有財産）である。
- （代替品がない）水は、市場原理に委ねられない基本的財産。

Water is a public good, not a private good.

\* 飲料水、農業用水としての水に論点が集中

さらに、水に込められた多様な価値を汲み取る必要性！！

諸富徹さんは、環境経済学の観点から、水の量的・質的保全を念頭に置いた場合の価格づけの持つ意味と副作用について述べた。価格づけには、ミネラルウォーターのような市場価格と、水道料金のようなコストとしての価格、そして、価格を通じて水質や水量に対するインセンティブを変化させる制御価格の三つがあることを説明

した。その上で、開発援助の一環として必需財に近い財である水の価格を踏まえたインフラ整備が重要であり、ソーシャル・キャピタルの厚みを増すことが欠かせない手段であることを述べた。また、日本でも価格づけが進むが、森林環境税の考え方が、新しい水管理における公正な費用負担原理を探る上での興味深い論点を提起していると結んだ。

**オランダの排水課徴金制度と水管理組合の事例(1)**

- オランダ排水課徴金制度(1969～)・・・排水抑制に高いインセンティブ効果を発揮した事例として世界的に有名
- 汚水の量と質(COD:化学的酸素要求量、N:ケルダール窒素)に課税
- 平均課徴金料率は36ギルダー(1980年)から73ギルダー(1993年)へと急速に上昇

沖大幹さんは、水道料金を例にあげ、日本の上下水道料金が安いこと、ミネラルウォーターが奢侈財として位置づけられていることを指摘した。また、農業用水、工業用水の価格にも言及し、その上で、今、問題なのは「安く利用可能な水が足りないこと」と述べた。さらに水のコストを大口ユーザーにだけ負担させるわけにもい

かず、

「水は誰のものか」については、水循環全体を公の財産として捉え、公共の福祉に反しない限りで私的な利用を認めたいという趣旨で述べた。

http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/

### 水道水代は高いか？

平成15年度の1世帯当たりの品目別支出金額 (総務省統計局) [全世帯]

年間消費支出	約320万円
上下水道料金	約4.8万円 → 130円/日/世帯
電気代	約9.3万円
ガス代	約6万円
携帯(移動)電話通信料	約6.1万円
飲料	約4.2万円 (茶類12+珈琲ココア8+ジュース8+炭酸2+乳酸3+他8千円)

ものだったのか。

第二は、価格コントロールがうまく機能しない部分をソーシャル・キャピタルで補完するという論理はわかるが、それに応じて具体的な私たちのライフスタイルをどのように変えればよいのか。



こうした報告を受け、パネレドイスカッションではコーディネーターの鳥越皓之さんが「水は、『生きるための水』『ビジネスとしての水』という側面があり、それらが言い難く結びついているのが水の本質ではないか」と語り、壇上に並んだ沖、菅、諸富という若手研究者に対して質問を投げかけた。

第一は、水の私有化が問題になっているが、そのような現象が伝統的には見られなかったのかどうか。「伝統的な価値に基づく水の値打ち」というものはどのような

これら本質を突く質問に、各パネリストがどのように答えたかについては、当センターのホームページ

第三は、「安く利用可能な水が足りない」という指摘に対して、かつて日本はそういう水が豊富にあったはずなのに、なぜ足りなくなったのか。そこについての意見を聞きたいというもの。

ージをご覧いただくとして、環境税、上下水道の料金、水の所有・利用権、水の空間的・自然的な価値：など、水の値段は、今、多くの人々の頭を悩ましています。そのためか、フロアからも、現場に携わっている方からの疑問や意見が多数出され、現場毎に抱える問題の違いを浮き彫りにしてくれるものとなりました。



化の視点からもこの問題を取り扱いたい。これが、本フォーラムを企画したセンターとしてのメッセージでした。



#### アンケートに寄せられたコメント

- ◆文化を軸として水の値段を考える試みは、大変興味深い。
- ◆多面的な視点からの水本来の価値というアプローチが新鮮だった。
- ◆空気や水はタダで安全でなくなった今、あらためて水について考え直させられた。
- ◆水道に携わる者として今後をとらえる上での視野を広げるのに役立つ。「水と衛生的環境」の視点が出なかったのは残念。水道の果たした最大の便益です。
- ◆「湯水のごとく」というのは大切に形容だったはずなのに、その逆転はなぜ起こったのか。

◆発展途上で給水プロジェクトに関わっていますが、「資源は誰のものか」「最適な価格帯とは何か」いつも頭を悩ませています。

◆水は誰のものかという論点は、今後の自然保護運動の一つのあり方を示すものと思う。

◆水の値段と一口に言っても、本当に解釈は無数にあると感じました。

◆水からヒューマンセキュリティについて考えられることがわかった。

◆21世紀は、市場では認識されない価値(たとえば環境)をいかに認識するかが大きな課題になると思う。

※本報告はフォーラムの紹介です。事務局の責任でまとめた概要版は、当センターホームページにも掲載しています。また詳細報告もまもなくホームページにて公開いたします。

<http://www.mizu.gr.jp/>